

なか ざと み
中 里 見

さと し
敬

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第14号

学位授与年月日 平成6年3月10日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)
中国学専攻

学位論文題目 中国小説の物語論的研究

論文審査委員 (主査)
教授 村上哲見 教授 寺田隆信
教授 中嶋隆藏
教授 花登正宏
助教授 三浦秀一

論文内容の要旨

目次

緒言

上編 話本小説の研究

第一章 『六十家小説』の目録学的研究

——『宝文堂書目』著録話本小説の再検討——

第一節 『宝文堂書目』は宋元話本を著録するという通説

第二節 『宝文堂書目』著録話本小説の再検討

(一) 『宝文堂書目』の編者と年代

(二) 清平山堂とその出版活動

(三) 『宝文堂書目』著録と『六十家小説』の比較検討

第三節 『六十家小説』の復元

(一) 熊龍峯刊行の小説

(二) 『宝文堂書目』著録と「三言」

(三) 『也是園書目』および『述古堂書目』著録の小説

(四) 『六十家小説』の復元

第四節 小結

第二章 『六十家小説』の体裁・墨丁をめぐる書誌学的研究

第一節 版本の表面的体裁について

第二節 墨丁の分布について

第三節 小結

附 『六十家小説』墨丁一覧

第三章 話本小説における物語行為

第一節 『六十家小説』

(一) 物語内容に関連するディスクール

(二) 物語行為の状況に関連するディスクール

(三) 物語行為における語り手と聴き手

第二節 『六十家小説』の継承

(一) 「三言」における物語行為

(二) 『金瓶梅詞話』と『西湖二集』における物語行為

第三節 『豆棚閑話』

(一) 『豆棚閑話』における物語行為

(二) 『豆棚閑話』の第一次の語り手と物語世界

(三) 『豆棚閑話』の第二次の語り手と物語世界

第四節 清末小説と近代小説

(一) 『二十年目睹之怪現狀』における物語行為

(二) 「狂人日記」における物語行為

第五節 小結

第四章 講唱文芸と話本小説の関係

第一節 「話本＝語りものの底本」説の問題点

(一) 「話本＝語りものの底本」説

(二) 「話本」の語議

(三) 話本小説の特徴と講唱文芸の特徴の混同

(四) 話本小説による講唱文芸の類推

(五) 現代の説書と小説

(六) 話本小説の評価

第二節 いわゆる「話本」の刊行形態

第三節 敦煌変文の分類

第四節 講唱文芸と話本小説の関係

- (一) 『三国演義』と『水滸伝』における散文化
- (二) 『六十家小説』における講唱文芸の痕跡
- (三) 講唱文芸と小説および演劇の相互関係

第五節 元雜劇における白

第六節 書記言語としての白話

第七節 小結

下編 物語論の基礎的理論と応用的実践

第五章 中国語テキストにおけるディスクール／イストワール

——時間の指示子による形式的識別——

第一節 バンヴェニストのディスクール論とジュネットの物語論

第二節 形式的識別に対する批判

第三節 白話小説におけるディスクール／イストワール

- (一) ディスクールとしての「-今」「今-」
- (二) イストワールとしての「当-」「此-」「那-」「其-」
- (三) 「次-」「明-」「昨-」
- (四) 例外的用法
 - (四・一) 対比的用法
 - (四・二) 被伝達部における用法

第四節 『史記』におけるディスクール／イストワール

- (一) ディスクールとしての「今-」
- (二) イストワールとしての「是-」
- (三) イストワールとしての「明-」
- (四) ディスクール／イストワールの区別に非関与的な「旦日」
- (五) ディスクールとしての「昨-」

第五節 現代漢語におけるディスクール／イストワール

第六節 小結

第六章 魯迅のテキストの物語論的研究

——魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡——

第一節 テキストにおける時間の二系列

第二節 語る現在の「我」／語られる過去の「我」

- (一) 「孔乙己」
- (二) 「一件小事」

第三節 語る「我」の語られる「我」による代行

(一) 「故郷」

(二) 「社戯」

(三) 「祝福」

第四節 回想する「我」／独白する「我」

第五節 「傷逝」の独白と自由間接話法の定義

(一) 自由間接話法の定義

(二) 「傷逝」自由間接話法

(三) 独白するエゴイストの「我」／回想する悔恨の「我」

第六節 小結

第七章 中国文学研究における物語論

——陳平原『中国小説叙事模式的轉變』をめぐって——

第一節 物語論受容の状況と問題点

(一) 「態」の欠落——全体的観点から

(二) 「視点」と「パースペクティブ」「人称」——個別的観点から

第二節 物語論の意義と可能性

第三節 小結

第八章 中国文学における物語行為の諸相

第一節 賦における物語世界内の語り手

第二節 「五柳先生伝」と自伝の形式

第三節 唐代伝奇における等質物語世界——「周秦行紀」

第四節 記における等質物語世界

第五節 物語世界内の語り手による等質物語世界——『痴婆子伝』

第六節 物語状況の一覧表

第七節 物語行為と物語内容の同位性——「二拍」の物語行為

第八節 士大夫の小説観——紀的の『聊齋志異』批判

第九節 小結

1 本論分の目的

1936年に書かれた鄭振鐸「中国小説史料序」は、中国小説の研究はその歴史と内容の研究だと規定したうえで、版本・目録研究と、物語内容の変遷すなわち本事の研究の必要性を強調している。ここ半世紀余りの中国小説研究は、おおむね鄭振鐸の示した方向に沿って行われ、重要な成果が続々と著されてきた。

その内容の研究が明らかにするところでは、個々の物語の内容は、時代とジャンルを超えて継承されてきた。例えば今日、『三国志』の物語内容は、小説だけでなく、京劇などの芝居や、評書・

快板書・鼓書といった講談、さらには映画やテレビ・ドラマとしても親しまれている。つまり、共通の物語内容が、文学史上において、語りものや演劇、文言小説や白話小説といった様々な異なる表現形式によって出現することは、普遍的な現象なのである。

そもそもある物語が成立するためには、語られる内容と同時に、それを表現する言語の特定の形式が存在しなければならず、その両者は不可分の関係にあるといえる。しかし、鄭振鐸の上述の文章にも示されるとおり、従来の中国小説の研究は、内容の面に重点が置かれた結果、表現形式に対する研究は必ずしも十分であったとはいえないように思う。したがって、共通の物語内容が語りものから書面文学へ移行するには、どのような条件と要因があるのか、両者の言語表現の形式にはどのような変化が認められるのか、といった問題については、これまであまり論じられてこなかった。

本論文は、版本・目録の整備と内容研究の進展を承けて、中国小説をその表現形式に即して、物語論 narratology の立場から追究しようとするものである。ここでいう物語論とは、ある出来事（物語内容）を口頭や文字などの言語によって伝達するという人間に普遍的な行為の所産であるナラティブ（物語）を、その表現の形態に即して研究しようとする立場である。したがって、従来の内容研究が「何が書かれているのか」という物語内容に関心を寄せるのに対して、物語論は「いかに書かれて（語られて）いるのか」という表現のあり方そのものをより重視することになる。こうした立場からの研究は、従来の版本・目録および内容研究を補完するものとして、中国小説を総合的・全体的に理解するためには欠かすことのできない一分野であると考えられる。

フランスを中心とした西洋において発展した物語論は、ソシュールやバンヴェニストらによる一般言語学の成果に由来すると同時に、二十世紀になって現れた多くのアヴァンギャルドなテキスト——「何が書かれているのか」という物語内容に対する関心からだけでは十分理解できないような——を後追いつくかたちで、現実の作品理解の必要に迫られて生まれたものだといえる。そのような意味で、物語論を西洋思想・言語学と西洋の文学現象という固有の歴史的な文脈から切り離すことは不適切である。しかし、ソシュールやバンヴェニストが、かりに個別言語を扱っていても、常に一般言語学への関心と洞察に支えられているように、物語論も単に西洋の文学現象を分析する道具という限定をはるかに超えて、一般理論としての普遍性を獲得していることは正当に評価されるべきである。

したがって本論文では、物語論という一般理論の成果をふまえて、中国小説という個別文学の問題を考察することになる。一般論の概念を導入することによって、個別文学としての中国小説の諸問題を、より明確に議論することが可能になると考える。また、中国小説の特殊性よりもむしろその普遍的な側面が示され、中国小説を各国文学と共通の問題設定によって論じることが可能になるはずである。さらに、個別文学研究の立場から様々な事例を報告することは、一般理論の側へのフィードバックにつながり、一般論の進化に寄与することになると思う。以上のような意味で、本論文では一般論としての物語論と個別文学としての中国小説の関係を考慮したうえで、中国語・中国文学の実際に即した物語論の運用を心がけ、西洋の物語論の単なる機械的移入に終わらないように注意

を払った。

2 本論文の構成

本論文は、上編「話本小説の研究」および下編「物語論の基礎的理論と応用的実践」の二編からなる。

上編には、話本小説を対象とした個別文学史的な考察を収める。話本小説は、語りものから独立して、書面文学として最初に定着した形態であり、中国小説史上、口語に近い白話という文体で書かれた最も早いものである。従来の内容を重視する研究では、語りものと話本小説の内容が一致することから、話本小説は講釈師の底本であったという見解が示されてきた。しかし、宋代（十～十三世紀）の都市で盛えた語りものと、現存最古の話本小説が出版された明代（十六世紀）との間には、三百年から六百年の隔たりがあり、そのような単純な直接的関係にあったかどうかは疑問である。特に、宋代に白話で書かれた小説のテキストが現存しないことから、その時代に明代の話本小説と同じような白話の文体が成立していたことは考えにくいのである。

上編では、話本小説および白話による小説の成立の起源に関わるこうした問題を考察した。まず現存最古の『六十家小説』を対象として、第一章では目録学、第二章では書誌学の観点から考察を行った。この2章はテキストに即した物語論的研究の基礎となるだけでなく、物語言説 *récit* と物語内容 *histoire* を正しく区別する物語論の観点を導入することによって、先行研究を再検討しようとするものである。第三章は、従来講釈師の口吻をそのまま反映したものとされていた表現を、物語行為 *narration* という概念で分析することによって、話本小説の表現形式の問題として考察しようとするものである。第四章では、歴史的観点を加えて、語りものから話本小説に到る過程を考察し、書面化にともなう表現形式の変化によって白話の文体が確立していく状況を整理した。

下編では、物語論を中国文学研究に応用する際の基礎的問題を考察し、あわせて実際の作品への応用を行った。西洋の文学研究においては、今世紀初頭のロシア・フォルマリズムの形式研究と、言語理論の発展にともなう記号論の成果に基づいて、1960年代からフランスを中心に物語論が展開されてきた。しかし、物語論は精緻なテキストの語源的分析を基礎とするだけに、形態変化を欠き、時制を持たない中国語に対して、印欧語に基づいた理論を直接適用するには困難な点が少なくない。そこで、下編においては、中国語の性質と中国文学研究の実情に即して考察を進めた。

第五章では、バンヴェニストによるディスクール *discours* / イストワール *histoire* の区別が、印欧語では主として時制に表れるのに対して、中国語では時間の指示子 *indicateur* が有効な指標となることを明らかにした。第六章は、前章の基礎的考察を魯迅のテキストに応用する試みで、物語論・文体論の立場から魯迅の表現の新しさを考察した。第七章は、中国文学研究において最初に本格的に物語論を導入した陣平原氏の研究を取り上げて、その問題点と意義を考えるものである。第八章では、物語論の観点から中国文学の様々な作品を考察し、中国文学が獲得した表現形式の多様性を指摘すると同時に、物語理論が小説に限らず、中国文学の広い分野に有効であることを示した。

以上の論文本文に加えて、参考論文として以下の二篇をあわせて提出した。

一 李漁の小説——「譚楚玉戯裡伝情、劉藐姑曲終死節」を中心に——

二 〈三言〉における悲劇的作品の考察

この二篇はいずれも上編で扱う話本小説に関する研究である。しかし、もともと作品論として書かれたものであり、本論文のテーマとは一致しない論点を含むため収録しなかった。

3 本論文の内容

各章の内容と考察の結果をまとめれば、以下のとおりである。

上編 話本小説の研究

第一章 『六十家小説』の目録学的研究

——『宝文堂書目』著録話本小説の再検討——

明嘉靖年間の晁瑛の『宝文堂書目』は宋元話本を著録したものであるとして、これまで小説史研究の重要な資料と見なされてきた。『醉翁談録』などに見られる記録から、宋代すでに現存の話本小説と共通の物語内容を持つ講談が語られていたことは確かである。しかし、現存最古の話本小説のテキストは、明代の清平山堂刊『六十家小説』まで下るのであり、それゆえ『宝文堂書目』の著録は宋元話本の具体的な記録としてとりわけ重視されてきた。

ところが、『宝文堂書目』著録の小説名と『六十家小説』の篇名とがほぼ完全に一致すること、また清平山堂刊行の他の書籍が『宝文堂書目』に著録されていること、の二点を考えあわせるなら、『宝文堂書目』著録の小説はいわゆる宋元話本そのものではなく、清平堂の『六十家小説』であると思われる。

『宝文堂書目』に著録されている話本小説が『六十家小説』であるならば、逆に『宝文堂書目』を利用して、『六十家小説』のすでに失われた篇を復元することが可能になる。その結果、現存の二十九篇に加えて、熊龍峯刊行の三篇、「三言」の題注と『宝文堂書目』著録の一致する三篇、『也是園書目』および『述古堂書目』著録の十一篇を、『六十家小説』の一部であったと推定し、全六十篇のうち四十六篇を明らかにしたと考える。

以上の結論は、『宝文堂書目』の見直しを迫るだけでなく、宋代すでに話本が存在したという考え方にも疑問を呈するものとなるであろう。

第二章 『六十家小説』の体裁・墨丁をめぐる書誌学的研究

前章の考察によって、『宝文堂書目』に著録された小説は、宋元話本ではなくて、『六十家小説』を中心とした明代ものであることが明らかになったと考える。それではこの現存最古の話本小説集である『六十家小説』のテキストの由来はどのようなものであるのか、という疑問が生じる。これは、目録学的にも書誌学的にも記録や実物の存在しない、白話小説の起源に関わる問題である。

本章では、上述の問題に対して、『六十家小説』のテキストの体裁と墨丁という書誌学的特徴に着目して、可能な限りの推測を行った。その結果、体裁・版心・版式・版木の破損といった状況から判断して、特に「洛陽三怪記」をはじめとする4篇は、旧本の版木をそのまま利用して印刷し、『六十家小説』に入れた可能性がきわめて強いと考えられる。一方、二十九篇中十九篇のテキストに見られる墨丁は、刊刻にあたって依拠した原本の不鮮明字が、墨丁として残ったものと考えられる。したがって、『六十家小説』は何らかの先行するテキストを覆刻したものである可能性が高い。現存最古のテキストが、先行するテキストを覆刻したものであるという状況は、元刊雜劇の場合と一致する。これより以前の白話と話本小説の起源は、テキストの現存しない暗闇の中に隠されている。

第三章 話本小説における物語行為

話本小説にしばしば見られるいわゆる講釈師の口吻は、宋代の講談の口調をそのまま反映したものだとしてきた。さらにはこれを手がかりに作品の成立年代を推定する研究さえ行われた。

しかし、これを表現形式の観点から見直すと、物語論における物語行為 narration / 物語内容 histoire の区別のうち、物語行為に相当するものであり、必ずしも歴史的な現実に還元できるとはかぎらないだけでなく、むしろ物語（ナラティブ）に普遍的な形式の問題として考察されなければならない。

本章では、まず『六十家小説』を取り上げ、物語行為の地点、時間、語り手、聴き手といった問題を検討したうえで、話本小説の様式的确立と変遷を考察した。物語行為の地点と問題を物語内容のそれと接近させることによって、講釈師に扮した語り手は、あたかも自分が出来事を目撃したかのような全知の語り手の地位を獲得している。ところが、物語行為は実は物語内容に後れるある一時点であることが、様々な表現によって確認されるのである。また、語り手や聴き手が顕在化し、物語内容を離れたおしゃべりを展開するといった現象は、白話の文体が未熟な初期の話本小説よりも、後期の作品においてより顕著になる。

清の『豆棚閑話』は、話本小説の中で最も特異な虚構の物語行為を設定している。それは複数の語り手が豆棚の下でかわるがわる物語を語るというものである。物語世界内の語り手が自分の体験した等質物語世界を語るという形式は、それまでの話本小説の形式とは全く異なるものである。

西洋文学と接触した後の清末小説や近代小説においては、手記や日記による物語世界内の語り手が多く出現するようになり、講釈師に扮した中国伝統の話本小説の形式から完全に解放された。

第四章 講唱文芸から話本小説に到る過程

話本小説を宋代の語りものの底本と見なす説は、単に物語内容の一致のみを根拠とするもので、白話言語の歴史やテキストの成立といった問題を無視したのもだといわざるをえない。本章では、話本小説が表現形式を獲得する過程を、講唱文芸の形式や白話の成立といった問題との関連の中で

考察した。

敦煌変文や「成化説唱詞話」は、七言齊言句の連続からなる詩讚系の講唱文芸を反映したテキストである。詩讚系では七言の歌詞によって物語進行の叙事の機能が担われることが多い。詩讚系は唐代の変文から現代の京劇に至るまで一貫して継承されているが、書面文学として残されることはまれである。一方、長短句からなる楽曲系の講唱文芸は、流行の変化にともない次々に新しい形式に移り変わるけれども、高級文人に愛好されたためテキストが残りやすい。楽曲系の演劇は、叙事機能を中心とする白と、抒情を主とする唱との繰り返しからなる。

話本小説は、講唱文芸の場から独立し、読むための書面文学として成立する過程で、講唱文芸の形式を大幅に散文化することによって、叙事の機能は完全に白話の散文によって担われるようになった。こうした変化は、上演用の元雑劇のテキストが唱しか記録せず、のちにレーゼ・ドラマとして改編された結果、セリフが記されるようになったのと、共通するよう思う。つまり書面文学として成立するに至って、はじめて白話による散文化が行われたのであり、同時に書記言語としての白話も発展したのだと考えられる。

このように話本小説は、読み物としてのテキストの成立と、散文化による白話の完成という、いずれも講唱文芸から書面文芸から書面文学への移行という趨勢の中で誕生したのだと考えられる。

下編 物語論の基礎的理論と応用的実践

第五章 中国語テキストにおけるディスクール／イストワール

——時間の指示子による形式的識別——

バンヴェニストによるディスクール *discours* / イストワール *histoire* の区別は、言語の普遍的性質の一面を明らかにしたものだといえる。形態変化のない中国語においては、印欧語のような時称による形式的識別こそ不可能であるが、時間の指示子 *indicateur* には明確な使い分けが認められる。中国語テキストにおいても、ディスクール／イストワールを併せ持つ言語の二面性が語り手の属する物語行為／作中人物の属する物語内容を混乱なく提示し、物語を語り／物語が語られることを可能にしている。

本章では、時間の指示子による形式的識別について基礎的調査を行った。白話の例として『六十家小説』を、文言文の例として『史記』を調査し、ディスクール／イストワール区別が時間の指示子に反映していることを確認した。ただし、形式的識別の指標となる個々の語彙については、共時的にも通時的にも異同があると考えられる。指標となる指示子の具体例を現代中国語（普通話）で示せば、次の通りである。

○ディスクール

「如今」「現在」を中心とした、「昨日天～今天～明天」という系列

○イストワール

「此時」「這時候」を中心とした、「前日～此日～次日」「前一天～這一天～第二天」という系列

この場合、「此時」は書面語的で、「這時候」は口語的であるという違いにもかかわらず、ともにイストワールであるという点では一致する。つまり書面語か口語かという問題と、ディクール／イストワールの問題とは、範疇を異にするのである。

第六章 魯迅のテキストの物語論的研究

——魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡——

従来の魯迅研究は、文学的言語的問題をも、魯迅という作家の精神と思想に解消してしまう傾向から免れえなかった。本章では、物語論・文体論の観点から、魯迅のテキストを表現形式と言語に即して考察した。

語り手「我」が過去を回想するという形式の物語では、語り手の語る現在（物語行為）と、語り手によって語られる過去（物語内容）という二つの相が存在する。ところが、この両者が整然と分けられないような物語言説においては、「我」の語りは回想というよりは独白と呼ぶべきものに近づく。それは、物語行為と物語内容の同時化、および語り手「我」と作中人物「我」の不分化という事態である。こうした現象は、「故郷」「社戯」「祝福」といった魯迅のテキストに独特の抒情をもたらしている。

時間の指示子の規範的使用を放棄することによって獲得された上述のような効果に加えて、自由間接話法を大量に駆使した「傷逝」という作品は、魯迅のテキストの中でも最も前衛的なものである。伝達部が消失し、ダイクシス *deixis*（直示子）が物語行為の今ではなく物語内容の今を指すといった自由間接話法の特徴は、時制のない中国語においても共通であり、その成果として、語り手と作中人物の融合という効果が認められる。

こうした考察を通して明らかになるのは、回想形式を極限まで追求した魯迅のテキストが、プルーストやジョイスのような今世紀西洋のアヴァンギャルドなテキストと重要な特徴を共有するということである。

第七章 中国文学研究における物語論

——陳平原『中国小説叙事模式的轉變』をめぐって——

独自の伝統と蓄積を誇る中国文学と、文献学を中心に高度に発達した中国の学問とに依拠する中国文学研究は、マルクス主義以外の西洋の研究結果を安易に適用することを拒んできた。しかし、今世紀に飛躍的な進展をみた言語理論とその帰結である文学理論が、西洋の文学現象の分析に限らない普遍性を有していることは正当に評価されるべきである。

陳平原『中国小説叙事模式的轉變』は、従来の思想的社会的観点ではなく、文学の形式的観点から中国近代文学の成立を論じたものである。物語論を初めて本格的に取り入れた同書は、同時に中国文学研究が抱える困難な状況を反映してもいる。

本章では、物語論の体系的理解を阻む一因として、まず中国語への翻訳・紹介の不備を指摘した。

特に、関心が視点論に集中した結果、物語行為論が完全に欠落してしまっていることは、陳平原氏のみならず、中国の学界に広く共通する。陳平原氏のその後の研究は、文学史の書き換えという方向に傾いているが、本書で示された形式研究の可能性と文学観の転回は、中国文学研究を一挙に新しい段階へ引き上げるものだといえ、同書の正当な評価と発展が期待される。

第八章 中国文学における物語行為の諸相

中国の小説は、文言小説は歴史記録である伝の形式、白話小説は講談を模倣した形式を基本としており、一見形式的な多様性に乏しいかのような印象を受ける。

本章では、物語世界内の語り手、および等質物語世界の語り手という、中国文学史上成立に困難をともなった形式を考察することによって、中国文学の形式的多様性ととも、基本的形式の強固さをあわせて指摘する。

一般に歴史記述においては、物語世界の外部に位置する歴史家（語り手）が、自分自身の登場しない異質物語世界を記述する。中国の小説は基本的にこのような歴史記述の形式を踏襲している。

ところが、賦においては二重三重の虚構の状況が設定され、物語世界内の語り手が生まれている。一方、自分自身の体験を語る等質物語世界は、記と称する様式にしか認められず、自伝さえも第三者の語り手に仮託された。物語世界内の語り手が自分自身の等質物語世界を語るという形式は、『痴婆子伝』という好色小説においてようやく見出される。

中国文学の中にも、様々な形式の作品が存在するとはいえ、小説が基本的に歴史記述の形式に依拠せざるをえなかったという事実は、士大夫の小説観にまで一定の影響を与えているように思われる。

論文審査結果の要旨

中国における古典小説の研究は、伝統的に書誌学的研究と物語内容の歴史的研究、また近代文学については思想性の追及などに重点がおかれ、多くの優れた成果を生み出してはいるものの、いかに語られているかという表現行為の形態そのものを分析するような研究は甚だ乏しく、ほとんど欠落しているといってよい状態であった。本論文は、そうした欠落を補完すべく、物語論(narratologie)の視点から古典小説を中心とするさまざまな作品の分析を試み、創見に富んだ豊かな成果を生み出している。

本論文は緒言、上編5章、下編4章及び結語から成る。上編「話本小説の研究」では、まず第一・二章において明代の『宝文堂書目』に著録された話本小説を宋代講談の筆録と見なす説を否定し、同じ時期に清平山堂が刊行した話本集であることを目録学および書誌学的に検証する。このこと自体がひとつの興味深い成果であるが、本論文においては副次的産物として位置付けられ、主旨は

宋代の語り物と明代の話本小説とは、話題が共通な場合でも表現行為の形態からいえば明確に区別すべきであることを指摘する点にある。そして第三章「話本小説における物語行為」では、話本小説の作者を講釈師に扮した語り手として位置付けたうえで白話小説の生成発展の過程を論じ、ついで清朝になって現れた『豆棚閑話』の複数の語り手を登場させるという手法が、従来の話本小説を超える特異なものであることを指摘する。更に第四章「講唱文芸と話本小説の関係」では、唐宋時代の講唱文芸が散文化されて話本小説が形成されて行くとともに、口頭語の白話が書記言語として発展して行ったことを論ずる。口頭語すなわち白話、書記言語すなわち文言とするような従来の単純な言語観の見直しを迫り、白話文学の生成発展について新たな視点を提起する重要な指摘である。下編「物語論の基礎的理論と応用的実践」では、まず第五章「中国語テキストにおけるディスクール／イストワール」において、論者がそこから多くの啓発を受けたジュネット (G. Genette) の物語論の基礎となったバンヴェニスト (E. Benveniste) のディスクール (discours) / イストワール (histoire) の区別は、フランス語では主として時称と人称に示されるが、時制の変化を持たない中国語においては、時間の指示子に典型的に示されるのであり、ディスクール／イストワールという二面性の分析が、中国語の文章についても、白話・文言の別にかかわらず、普遍的に有効であることを、話本小説や『史記』などの文章を例として論ずる。この章の所論は全く論者の独創にかかるものであるが、明快で説得力に富み、中国語テキストの読解についての多くの有意義な示唆を含んでいる。第六章は前章の成果をふまえて魯迅の小説を分析したもので、魯迅の小説には回想形式の作品が多いことを指摘したうえで、その中には「語る現在の我」と「語られる過去の我」とが時間の指示子によって整然と区別されているものもあるが、むしろこの両者が渾然と融合している作品が多く、そこに独特の抒情的世界が醸成されることを論じ、更に魯迅のこの手法の効果は、『傷逝』において独白というスタイルをとることによって最大限に生かされているとする。いうまでもなく魯迅は、中国の近代文学研究の焦点となっている作家で、これまでに無数の論文が書かれているが、このような文体・表現手法の分析から作品を解明することは全く論者の独創にかかり、かつ少なからぬ研究者が注目して来た『傷逝』などの作品に新たな光をあて、その独特の抒情的世界の由来を解明したことは、論者の分析方法の従来の研究を超えるものがあることを示しているといえよう。ついで第七章は中国における物語論の導入状況の紹介とそれに対する批評、陳平原の『中国小説叙事模式的転変』がいくらかの誤解や欠点を含みながらも、従来の研究方法を大きく超えて新たな道を切り拓くことになるであろうことを述べる。第八章「中国文学における物語行為の諸相」では、物語論の分析方法が小説にとどまらず中国文学のさまざまな分野に応用することが可能であり、新しい豊かな成果をもたらすであろうことを例示的に論じている。その対象は賦・自伝・伝奇小説・記など広い範囲に及び、従って個々の作品もしくは様式論としては不足を感じさせるが、それぞれに犀利な切り口を示し、この分析方法がさまざまな分野において極めて有効であることを証し得ている。

総じて本論文は、従来の中国文学研究に欠落していた全く新しい視点から作品を分析することに

よって豊かな成果をもたらすとともに、今後の研究に新たな展望を拓くものであり、期学の発展に寄与するところ少なからざるものがある。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。